

## 農学教育のあり方と解決すべき就職問題

内田一徳

神戸大学大学院農学研究科 教授

### はじめに

農は国の礎です。食料の安定供給は国民生活の基盤です。これまで、農業が滅んで栄えた国はないことは、世界の歴史が物語っています。今、私たちは重大な岐路に立っています。近未来に予想される食料問題やエネルギー問題、地球温暖化・生物多様性も含めた環境問題に直面しています。20世紀は、大量生産・大量消費・大量廃棄の都市型文明だったといえるでしょう。では、21世紀はどんな文明であるべきでしょうか？ 私は、土・水・生物等が有する循環機能を基礎とし、自然と共生できる農村型文明であるべきだと考えます。21世紀は、美しい人工・自然環境を保全しつつ、食料生産と私達の健康維持・増進に責任を負う農学の出番だと考えます。

本文では、こうした農学教育のあり方と、いま問題になっている就職問題について、私なりの考え方を述べてみたいと思います。

### 農学教育のあり方

農学の使命は、農業を通じて、国民の健康の礎である安全な食料資源を開発・改良・保全するとともに、緑資源や水資源、生態系資源などの持続的・循環型地域環境を管理・保全するための持続共生の科学・技術の探求にあると考えます。農学は、将来の食料危機問題、地球温暖化や生物多様性などの環境問題から、エネルギーと健康問題までの食料・環境・健康生命に関連する重要課題を総合的に解決するための複雑系科学として大きく発展することが期待できます。理学部のように要素還元型ではなく、統合された複雑なシステム自体を教育研

究するという意味では、「ミニガイア(小さな地球)」が農学の教育研究対象です。そのために、農学は、生物学・化学・工学などの自然科学から農業経済学などの社会科学にいたる幅広い領域にまたがる「ミニユニバーシティ」でもあります。「ミニユニバーシティ」で得られた幅広い研究成果を駆使して、「ミニガイア」の種々の課題の解決にあたる、それが農学部・農学研究科です。

いま、近未来の食料問題やエネルギー問題、環境問題を解決するためのグリーン・イノベーション、ライフ・イノベーションが叫ばれています。食料の安定供給、環境の保全、新規バイオ産業の創成、および食の安全安心に向けた科学技術の開発は、世界レベルの重要な国家戦略項目です。農学部・農学研究科は、この分野の未来を開拓し、地域・国際社会で活躍できる人材の育成を通じて社会に貢献することを使命とし、研究が生み出す知識や技術を産業社会に活かす実学を志向しています。こうした農学の価値を再認識できるように、入口の基礎教育と出口の専門教育を重視した農学の実学性を教育の中で重要視することが必要であると考えます。

神戸大学農学部・農学研究科では、「農場から食卓まで(From Farm to Table)の食料・環境・健康生命」をモットーに、図1に示すような3学科6コースおよび3専攻6講座構成とし、附属センターも「食料・環境・健康生命」の3ベクトルに合わせた食資源教育研究センター、食の安全・安心科学センター、地域連携センターの構成としています。教育プログラムも特徴的な実体験を重視した農学カリキュラムを組んでいます。たとえば「食の倫理」「緑の保全」「キャリアデザイン論」などの導入教育や、「兵庫県農林水産行政論」「農業農村フィールド演習」などの地域連携教育、「熱帯農学海外演習(ベトナム)」や「アジア農業環境海外演習(フィリピン)」などの国際連携教育など、多彩な教育プログラムを提供し、「食料・環境・健康生命」に関連する諸問題を解決できる国際的視野をもった人材を育成しています。農学の教育研究成果としてのブランド商品も豊富です。神戸大学ビーフ、日本酒「神戸の香」、ランランポテトチップスなど、多くのブランド商品を世に送り出し、好評を得ています。国際学術交流も盛んです。ベトナム、タイ、フィリピン、中国、韓国などのアジア諸国から、

スーダンなどのアフリカ諸国，ブルガリアやドイツなどの EU 諸国とも学術交流協定を結び，学生の現地実習，留学生交流，国際シンポジウムの開催など，多様な国際交流の場を学生諸君に提供しています。

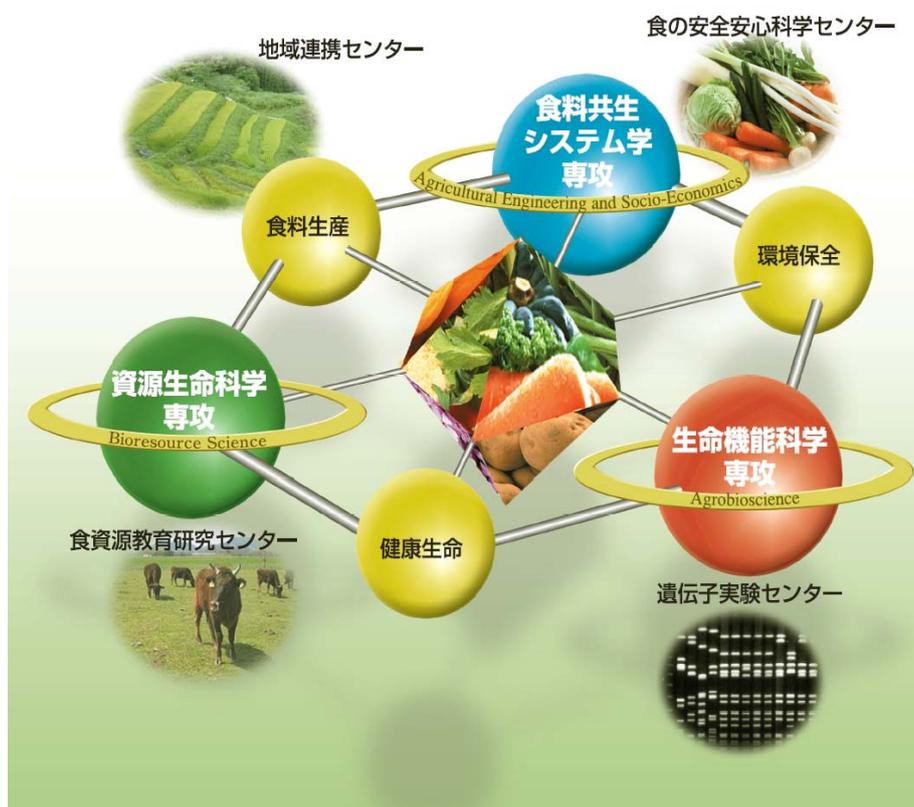


図1 神戸大学大学院農学研究科の構成

### 解決すべき就職問題

大学における学生の就職活動は，ほぼ学部3年生後期あるいは修士課程1年生後期から開始され，延々と6～9ヶ月近く続けられます。理系の学生でも，50以上の企業にエントリーして，時間と金の無駄使いを平気でしている学生もいます。これを受けて，就活する学生を選別する企業も時間と人件費を浪費しており，このままでは大学も学生も企業も，ひいては日本そのものが疲弊してしまいかねない憂慮すべき事態に陥っているといえます。学部学生の場合には十分な専門教育を受けないまま就職活動に入りますので，企業は専門能力や目的意識をもつ学生ではなく，リーダーシップや発言力をもつクラブ活動経験者を優先して採用することになりがちです。こうした理由から，学部学生は就職活

動のために学業よりもクラブ活動を優先し、学部や修士課程の専門教育や卒論・修論の研究教育が疎かになっているのが現状です。文科省が強く求めている学士力の強化や大学院教育の実質化は、就職問題の解決なくして実現は不可能です。

こうした就職問題を解決するための提案をしたいと思います。

- 学部・修士課程学生の卒業・修了を9月とし、就職活動は卒業あるいは修了した後に、その卒論や修論の成果をもって行う。
- 3年生の夏休みには、企業や官公庁へのインターンシップやキャリア教育を充実させ、目的意識をもった少数の企業に対する就職活動を行うことを実践できるように指導する。理系学生への大学推薦による就職を優先させる。
- 理系学生に対しては、JABEE認定校を専門教育の品質保証および企業の求める人材教育を行った教育プログラム校と認定し、GPA評価と推薦による就職を積極的に受け入れる。
- ボローニャプロセスで提案され、近い将来に世界標準の大学教育になると考えられる5年制の学部・修士課程一貫コースを設定し、卒論なし・学士なしで徹底した専門教育を行う。GPA優秀者や博士課程進学者には、無償奨学金を与える。

こうした就職問題を国大協や全国学部長会議で積極的に取り上げて議論するとともに、企業とも協議して、一日も早く解決することが教育立国としての日本を救うことだと確信しています。私の提案に対して、皆さんからのご意見を伺えれば幸いです。